

令和7年度 園評価書

園番号

48 園名 原こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている、C : あまりできていない、D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
『自分が好き みんなが好き』	安心して自分からやってみる子	・自分の思いや感じたことを言葉や行動で表現している	○どの子ども年度当初より思いを保育者や友達に出すようになってきている。言葉で表現すること、相手に伝えようとする気持ちの育ちがたくさん見られている ▲やりたいという気持ちを伝える、自分で考えてみる姿が少なく、保育者に委ねることが多い。友達同士で話し合う姿も少ない	A	A	・評価指標は%で数値化したほうがよい ・学校でもすぐに答えを聞いてくることが多い。 自分で考えるよう言葉を返している	・保育者もクラスの一人となり遊び、子どもから見て様々な立場の関りをする (仲間、思いを兼ねてくれる存在、見守る、後ろから支えてくれる等) ・保育者がヒントになるモノやコト、言葉がけを意識して関わる ・友達同士の伝え合が難しい子には、保育者が代弁したり言葉を提案するなど思いが伝わる経験の手助けをする ・子どもたちが「もっとやりたい」と思えるため、まずは子ども理解と見取りを重点的に行う。 捉えた上で子どもに経験させたいことと環境設定を考える
		・「もっとやりたい」という思いを持ち、自分から主体的にかかわり遊んでいる	○自分達がやりたい遊び、保育者が用意した環境の中ではやりたいという気持ちを出て遊ぶ姿が見られる ▲「やってみよう」という気持ちはあると思うが、自分で考えたり行動する力が弱い。「もっとこうしたい」と考えたり、工夫したりして遊ぶ姿は少ないと感じる	B	B	・異学年を見て真似をすることは家庭ではできない貴重な体験だと思ふ ・子どもの思いを否定せずにかかわる大切さをは必要であり、大事にしてほしい	・その年齢において習得しておくべき基本的な生活習慣の内容を年度はじめに押さえておき、3学期末までに個々の子が無理なく習得できる見通しをもって保育をしていく ・基本的な生活習慣を最後まで見届ける必要があるのと、丁寧にやる理由や意味もその年齢に応じて伝えていく
		・基本的な生活習慣が身につくよう支援 (視覚支援、言葉かけなど) が用意されたり保育者が見本となったりしている	○基本的な生活習慣は、保育者が手を添えやり方を日々知らせていくことを継続していったことで、少しずつ身につく、自分でできるようになっている。 ▲自分からやろうとする意識が少ない、声をかければ思い出してやりだす子が多い	A	A	・家庭では子どもが親の時間に合わせる事が多く子どもに考える場がないと感じる。保護者にも働きかける必要を感じる	

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	・ウェブ図(遊びの構成図)に準備物や配慮を記述し、事後に加筆し発達や子どもの興味・関心に合わせた遊びが用意・展開されている	・遊びの写真を載せることでウェブ図をわかりやすく作成出来た。また先月のウェブ図に今月の姿を加筆していくことで、遊びのつながりや展開、何の経験が生きているのかなどがわかりやすくなった。しかし実際の保育に生かされているか	B	B	・ウェブ図を作成し加筆しながら保育を進めていくことは良いと思う	・ウェブ図に対しての重要性や必要性について職員の捉え方に差がある。ウェブ図について年度当初に書き方を含めて共通理解をする場を作る。また、保育後子どもがどう保育が変化したのかなど年に何回か職員で振り返っていく必要がある。 ・複数担任のクラスはよく話し合い発達に合わせた教材、環境の工夫をする
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	・一人一人の生活リズムに合わせて安定した穏やかな気持ちで園生活が送れるように、子どもの思いに寄り添い、個々への配慮をしている	・一人一人の登園時間、保育時間を把握し、情緒、体調面を個々で踏まえながら、丁寧に園職員間で共有することで、個々へ手厚く配慮できるようにしていった。	A	A	・リズム表があることで生活リズムがわかる子もいる。発達や年齢によって生活リズムは違うので臨機応変に作成していくことが大切だと思う	・全職員がわかりやすいリズム表の作成し、一日のリズムを作り毎日繰り返すことで子どもが自主的に動けるようにする ・保育時間が長い子への対応(特に乳児)休めるスペースや落ち着いて遊ぶ時間を作る。
	(3)環境を通して行う教育及び保育	・保育者が素材の特性を知り子どもの発達や興味に合わせた教材や素材が用意され、子どもが試行錯誤しながら遊ぶ環境が整っている	・個々の発達、月齢に合わせて自分でやりたい気持ちを重んじ見守ったり手伝ったりした ・子どもの発達や興味に合わせた教材、素材を用意し環境を作ったが教材や素材の特性理解や活かすことは足りなかったことがあった	B	A	・素材を提示するに保育者が素材の特性を知ってしておくことは大事だと思う ・失敗を嫌がる子もいるが、失敗してもそこから気づくことが大切だと思う ・自然が豊富な地区なので保育に活かして行ってほしい	・保育者が特性や使い方、遊び方を知らない子どもたちは遊び込むことができないため、季節ごと園教材研究をしたりどんな素材が園にあるのかを全職員で共有して、教材や素材に触らずに終わることがないようにしていく。 ・身近にある素材を遊びに使いどんな経験をさせたいかどんな素材が良いか考え、子どもと一緒に試行錯誤していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	・様々な想定した訓練を行い、子どもも保育者も課題解決しながら自分の身を守る行動が身につけている	・昨年度の減災教育での学びから計画を見直し、想定を変えたり、身を守る行動のポーズを伝えたり保育者も給食職員も子供の身を守る行動について考えることができてきた	B	B	・小中で引き渡し訓練の連携をしているが、こども園もかかわる家庭もある。今後連携を図っていくことを意識していく必要がある	・職員が正しい知識を身につける訓練を行なう。また訓練後に必ず子どもと振り返りを行なったりフォローで入る職員への指示や連携の取り方の反省点を職員全員に周知したりして日々見直しをする ・予告無しの避難訓練を増やし人任せにせず、叱咤の判断で行動する訓練をする
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	・発達に合わせた食事のマナー(手洗い、座り方や姿勢、食べ方など)身につけられるよう保育者が手本となり指導している	・マナーについては教育課程と個々の発達に合わせてその都度指導するとともに保育者が見本となつてかかわっている ・幼児クラスでは毎月の食育の日にお箸の持ち方や食事のマナーについて、イラスト等を用いながら丁寧に伝えている。	B	A	・食事のマナーは園で食べる一回で伝えることは難しい。家庭と協力しながら身につけていくようにしてほしい	・食育計画、保険計画を確認しながら指導する。各学年の繋がりを意識しながら、すり合わせていくと共に個々の発達の状況に合わせて個々に支援を行う ・食に対して関心が高い子を残しても平気という子もいるので子どもたちが食べることの大切さや喜びを感じれるような支援を職員で共有して同じ歩調で進めていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	・ケース討議を月1回行い、職員間で支援方法を共通理解している	・「困り感」を感じている子をケース会議で取り上げ多面的に支援方法を考えて担任にフィードバックしたり実践後の変化を会議で共有したりするようになった ・支援者会議を開きサポートプラン作成に活かしている	B	A	・子ども個々に違うので多方面との連携が大切と感じる。小学校は園での子どもの情報が欲しいことがある。園小中で一貫した教育することが大切だと感じている	・引き続き定期的にケース討議を行い、気になる子の姿や関わり方について話し合いを行い共有し、同じ思いで関わってもらえるようにする。また、次月の職員会議で必ずどうだったか成果を伝える
5 組織運営	(1)組織体制の充実	・職員会議を昼と夕に行い職員が同じ目標に向かい連携をとり、情報を共有しながら教育・保育を進めている	・多くの職員が会議に参加するように時間帯を組んで行っている。参加が難しい職員については、会議報告の時間を設け、口頭、書面伝達で全体共有している。 ・月の行事は前月初旬の会議で企画書の検討するため、実際に行う頃には内容を忘れてしまっている様子があった。	B	B	・様々な勤務形態の職員がいるのでメモでは難しい。小学校では対話を意識している ・必要な情報を簡潔に話すことが難しい職員が多くなっており、ポイントだけを押さえて話す意識をもつことは必要だと思う	・必要な情報を簡潔に話す等会議での発言の仕方を全体で周知したい ・作成者が役割分担、内容等を詳細に記載して早めに用意・配布もし目を通してもらう。担当が事前に時間配分や内容を確認をし、効率よく会議進行をする ・会議報告ができないときは参加した職員が書類上と口頭の両方で報告を行い、情報共有する
6 研修	(1)研修体制の充実	・研修テーマである「やりたいが叶う環境の工夫」に近づくと写真や動画を用いて手だての検証をしている	・動画で見ること客観的に自分の保育を見たり、他の保育者からの助言は日々の保育に生かされている ・月反省のやり方を改善し保育者の支援やそれに対する子どもの変化をまとめることで保育の振り返りに活かしている	B	A	・動画の活用は学校でも自己認知のために行うことがある。本来なら動画を使いどのような意図で指導しているか研修で伝えるのが理想だができないもどかしさを感じている	・その月の保育を研修テーマや手立と参照して振り返れたので今後も継続したい。前の月の反省とも照らし合わせて考える。動画や写真で振り返り有効活用する ・ビデオや写真を見てどの場面に着目するのか、ポイントを捉える目を養うために研究保育以外でもビデオ研を活かしていきたい
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	・「やってみよう」「またやりたい」と遊びがつながるような、物や場の残し方、片付け方の工夫をしている	・玩具を同じ種類に分けや片付けができるよう入れ物の工夫や視覚的掲示、作って残すなど次へつなげていけるようにした ・子どもと相談しながら明日に残す遊びを決め、次の日に繋がるようにしている	B	A	・作品ありきではなくできるまでの過程が大切だと思う。小学校では残す難しさがある。園で残すならば、「なぜ残すのか」残していく意義を伝えることも必要だと思う	・保育者が残しておきたいのか、子どもが残しておきたいのかを保育者は見極める ・片付けるからこそ、取っておく意味があるということを教えていく ・保育者も一緒に遊ぶ中で楽しかったことを他の子にも伝えてクラスに広げていく。遊び出し時に前回のことを思い出せるような声かけをする
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	・子どもの遊びや生活の様子を保育参加会、ドキュメンテーション、お便り配信で伝えている	・面談、ドキュメンテーションで普段の様子を伝えている。乳児は週に一度は写真でのドキュメンテーションの配信をした ・送迎時、保護者と顔を合わせたとき普段の子どもの様子を伝えるよう意識した ・給食サンプルの掲示、献立表の配信を行なっている。食育の様子をげんきっこだよりで伝えている	A	A	・保護者が求めるものと保育者が伝えたいことがずれていると感じる。保護者にニーズを聞きながら、園の教育保育の方針を伝え連携をとって子どもを育てていきたいと思う ・保護者は聞いて欲しい思いはあるので窓口があったらよいと思う	・ドキュメンテーションの中で遊びに「どのような育ちがあるのか」「遊びの中での学びの意図」を保護者に分かりやすく配信して育ちを伝えていきたい ・給食サンプルを見やすく掲示する。お便りはわかりやすく図や写真等をつけ配信する。 ・保護者とコミュニケーションをとり子どもの様子について相談できる体制を作る。気になることや家での様子などを聞き、子どもの様子の変化に気付けるようにする
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣園や小学校との交流を行い、教育保育の情報交換を図り連携を進めている	・いはら学の参観、1、5年生、中学生との交流など、地域での交流の機会を多く取り入れている。庵原こども園との交流も作っている。 ・庵原地区の小中合同研修に参加したり、小学校の夏休みの間に年長の研究保育を行い子どもの姿を共有したりして、就学に向けてどんな力をつけていくのが良いかを直接小学校の先生から聞くことができた	A	A	・小中との縦横のつながりは大事なので今後も増やしていきたい	・年長公開保育だけでなく普通の日でも小学校の先生に参観に来てもらい幼小連携や就学に向けて話し合いたい ・こども園の行事に参観してもらい機会を作る (参加会、運動会等) ・参観だけでなく意見交換まで参加してもらいと相互理解ができると思う
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	JAとの収穫体験や地域参観など地域交流を行い、園だけではできない体験の機会をもつ	・さつまいも掘りやみかん狩り、庵原交流館へのお便り届け、勤労感謝の日の活動等地域との交流を行い地域に開かれた園となっている ・乳児もさつまいものツルで遊ばせてもらうなど、直接的に関わりはなくても、地域の特産物等に触れる機会をもてた	A	A	・地域とのかかわりが大切だと思う。この地域ならではの経験や商店、消防、警察などを見に行くことは良い機会だと思う	・各学年も地域との繋がりは意識していきたい。散歩中の挨拶、交流館や小、中学校に遊びに行く等園を知ってもらう機会を全体計画に取り入れる ・収穫だけでなく園内の遊びに生かしているようにする (プラム、みかんの皮で色水、芋つる遊び等) ・園児の父母や祖父母など、身近な人たちに「先生」になってもらう機会を設け様々な体験ができればと思う